

演奏に
役立つ

One Point Lesson

OBOE オーボエ

こうやってかける、ヴィブラートの第一歩

鈴木純子 すずき・じゅんこ



- ◆出身 東京芸術大学附属音楽高校、東京芸術大学
- ◆所属 神奈川フィルハーモニー管弦楽団
- ◆趣味 相撲観戦、猫と遊ぶ(言葉教える)
- ◆血液型 O型
- ◆星座 いて座
- ◆読者にひとこと 上を向いて歩こう!
- ◆手紙の送り先 BJ 気付

みなさん、こんにちは。今年もあと少しですが、4月ごろに比べてどうでしょう、オーボエを吹くうえで何か変化はありましたか？私もいろいろ研究し、呼吸と、それに伴う姿勢を変えました。「進歩したい」と思う気持ちを持って、オーボエに接する時間を積んでいけば、よい結果を得られます。というか、できなかったことができてきた喜びは、みなさん、もう知っていますよね!? それって、脳も、とっても喜んでいる状態なんですって。脳科学の先生が言っていました。

■「イメージ」を持つ

さあ、今回はヴィブラートについて。このテーマを書くにあたり、いろいろな方のヴィブラート論について聞いたり読んだりしてみました。人によってアプローチの仕方が様々で、楽器によっても方法が違うのを改めて感じました。ということで、私の考えるアプローチの一例をお話します。

私が最初にヴィブラートを習ったのは、中学の吹奏楽部に入学して楽器に慣れてきた夏過ぎ、先輩から教えていただきました。今思い返しても、中学生とは思えない素晴らしい演奏をされた方で、ヴィブラートに関して、とってもよいお手本を間近で聴くことができました。だから自分の中で「よいヴィブラート」のイメージをすぐに持てたんですね。そう、ヴィブラートをかけるにあたっては、必ず「こんな(あんな)ヴィブラートをかけたい!」というイメージを持ってください。

それと一人ひとり音色が違うように、ヴィブラートも「答えは1つ」というわけではなく、それぞれに「個性」があるので、かけ方を覚えてからのその先は、あなたのセンス次第! そのセンスを磨くためにも、理想のヴィブラートを見つけること、または「あのヴィブラートは好きじゃない」というのに出会ったら、それを覚えておくのもよいことです。

私の好きなヴィブラートは、かけている音

の本体の音色と音程にヴィブラートが入り込んでいる(溶け込んでいる)ようなものです。ヴィブラートだけがものすごく浮き立って聞こえたり、常にすべての音にかけるのも好きではないので、心が「かけたい」と感じたときや、「この音にかけると効果的」と感じたときに、かけるようにしています。

■では、やってみよう

ヴィブラートのかけ方を物理学的・生理学的に説明すると、きっとたくさんの方が語られるのですが、難しいことは考えず、とにかくやってみましょう。

まず、口もと10cmくらい先に人差し指を立てて、ロウソクの火が消せるくらいの息を、一定のスピードと量で「フー」と吐きます。必ず「一定のスピードと量で」です。

そして、そのスピードと量の息ではロウソクの火が消えなかったとします。ここで改めて一瞬で火を消そうとしたとき、それまでとは比べものにならないスピードと量の息を吐きますよね!? 音符で表すと【例1】のような感じ、火を消そうとし

【例1】の瞬間がAのところで、そこで腹筋をすごく使ったのがわかりましたか?



ワッハッハと笑うとき、くしゃみをするとき、セキをするときも同じように無意識に腹筋を非常に使っていますが、どれもすべて速いスピードの息を瞬間的に吐いています。これが「おなかを使う」ということです。

ヴィブラートをかけるにあたって、「おなかでかける」とか「のどでかける」ということが話にのぼりますが、あえておなかを意識して動かさなくても、Aのように瞬間的に速いスピードの息を吐こうとすれば、自然に腹筋を使うことになるのです。息のスピードや量によって、腹筋の反応の仕方が変わってくるので、おなかを動かすことを考えるより、瞬時に吐き出す息のスピードや量を、何通り

か変えてできるように意識できるとよいと思います(【例2】)。

【例2】



これのできた

ら、スフォルツ



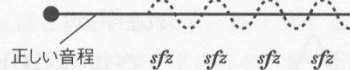
ェンドやフォル

テピアノやアクセントの間隔をどんどん狭めていく……、つまりテンポを上げていきます。そして同じことを楽器でやってみますが、そのときに絶対に注意しなければならないことがあります。

①まず、必ずその音を、正しい音程で、まっすぐ揺れることなく、よい音でロングトーンができること。

②それを確認してから、均等なタイミングになるようにスフォルツェンドをつけていきます。その次にフォルテピアノ、アクセント。そして少しずつテンポを上げていきます。そのときに必ず気をつけるのが、正しい音程からはずれないこと。スフォルツェンドやアクセントをつけたときの音が、ロングトーンで確認した音程より上にいってはいけません

【例3】悪い例



(【例3】)。なぜなら人の耳にはスフォルツェンドやアクセントで強調された音が残るので、それが正しい音程より高いと、その高い音程が耳に残る、つまりその音自体が「音程の高い音」と感じられてしまうのです。

最初はぎこちなくても、「とにかくかける」ことをしていれば、どんどん自分のヴィブラートになっていき、誰でもできるようになります。ただし、かけていない基本の音が正しい音程、まっすぐで充実した音で吹けていることが前提、かけたヴィブラートが変に人の耳に残るようなことがないように……ね。